

第13回 JGS 宝石シンポジウム in 大阪 報告

谷野 修子

「珊瑚～貴重なコレクションから」

原木から製品まで、こんな多くの様々な珊瑚を見たのは初めてだ。大正時代の写真一採取者と買取業者とが並んだ前に置かれた珊瑚の数々。この時代には、こんなに沢山の大きな珊瑚が採れたのだ。

赤珊瑚・桃珊瑚にある「フ」は原木を見るとほぼ中心を通っているのがよくわかる。Jewelry にする時、「フ」は見えないように考えられる。丸玉の bracelet で「フ」が所々に見え、茶道具で云うならば「景色」と言い表してもよいように、白いほのかな点がなんとも可愛らしい。珊瑚をカボションカットして ring にする時、中心を少し逸れてスーッと白いほのかな筋が入っていても美しいのではないかと見とれました。

また白珊瑚、その艶の美しさもさることながら、かまぼこ型にカットされたパーツが6個。小袋から出す時に聞こえた軽やかなやさしい音。鉱物ではない、有機物質起源の宝石であることを教えてくれる。



大正時代に作られた細かな彫がされた珊瑚の数々。しかしこの彫ができる職人はもうほとんどいないそうだ。そしてこの作品には作り手の名前は彫られていない。作品を見るとその職人が分かる。「どうだ！」と胸を張る職人の心意気が伝わってくる。

「花籠」と題された作品を見ると、籠の網目の細かさは無論、その中に透けて見える茎までも彫られている。すずらんの小さな花を支え持つ細い細い線。まさに超絶技巧。

このやさしい温かみのある Jewelry となる珊瑚。その資源が枯渇しないように採る量・時期・船の大きさまで規整されている。また養殖の技術を確認していこうという試みも行われている。因みに親指大の大きさに育つには50年以上かかるといわれている。

長く美しんできた珊瑚。その特長をいかした design で、魅力ある生かし方を今の生活の中にひろげていきたいものである。